

生産者通信

NPO法人
米ニケーションセンター
定価 100円(送料込)

新潟県山田錦協議会・穂肥前研修

ドローンによるリモートセンシングのデータを基に圃場診断

18名の圃場のばらつきは5~6%と少なく、高いレベル



毎年8月第一週に実施する「穂肥前」研修。協議会を代表して、岩淵会長より「来年は30年問題で制度が変わる。県はコシヒカリの作付け比率を減らす方向だ。まずまず山田錦の栽培が重要になる。」と挨拶。

現在では31台。1日350俵、1週間で2千5百俵を精米している。」と、同社の成長を説明。平成28年産の全国の山田錦の精米について、「27年産は45%精米で40時間、28年産は48時間。35%精米では27年産は57時間、28年産は65時間かかっている。その結果、造りでは、27年産は溶けがバラツキ、28年産は一定。これは胴割の減少、色選での被害粒の除去などで品質が上がったこと。」と指摘。



旭酒造は洗米工程で限定吸水しているの「胴割と被害粒のない山田錦」を要望されました。やはり29年産の品質勝負になります。○リモートセンシング 7月24・25・27日(豪雨のために一日延期)の3日間で、上越、長岡、見附、新潟、五泉の山田錦の圃場を、コニカミノルタが開発した特殊カメラを搭載したドローンで撮影し、圃場を計測。生育・施肥マップを作成して研



修会で解説しました。今回のリモートセンシングは、山形大学・藤井弘志教授、コニカミノルタ(株)、ヤンマーアグリジャパン(株)の協力を得たものです。計測結果はSPADを開発したコニカミノルタ(株)山村和之アシスタントマネージャーが解説。従来のSPADは圃場の数か所を測る「点」でしたが、リモートセンシングはSPADを田んぼ一面で計測し、MAPを作成しま

す。しかも、3cm角の高精度で撮影し、SPADの技術で補正処理することで田圃のバラツキをとらえます。そのデータを基にGPSを活用した自動ラジヘリで追肥します。圃場に一律で散布しても肥料が不足している部分、過剰な部分があり、地力を補正しながら追肥するという画期的なシステムです。今年度は栽培期間途中からの実施でした。来年度はMAPを活用して基肥からGPS連動のブロードキャストで可変追肥することで、労力・肥料コスト低減、収量増、品質向上が期待できます。○淡路先生の指導 講演の冒頭「山田錦の栽培からかけ離れている生産者が数名見られる。山田錦は契約栽培で生産者にメリットがあるの、高品質な酒米を作らなければならぬ」と、厳しく戒められました。「新潟県は軟質米になるので、硬質米にしなければならぬ。登熟温度は積算で980~1050℃と言われているが、近年の秋の高温で脱粒、胴割の発生原因となるので早目の930~980℃で刈取りするように見極める」との指摘を受けました。(裏面へ)